【63】

| | |
|---|---|
| 氏　名（本籍） | 田中真理（熊本県）（たなかまり） |
| 学位の種類 | 博　　士（文　　学） |
| 学位記番号 | 博　甲　第　4526　号 |
| 学位授与年月日 | 平成 20 年 3 月 25 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 審査研究科 | 人文社会科学研究科 |
| 学位論文題目 | **『萬葉集』における対句表現** |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 主　査 | 筑波大学教授 | 博士（文学） | 芳賀紀雄 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 博士（人文科学） | 清登典子 |
| 副　査 | 筑波大学教授 | 博士（文学） | 松本　肇 |
| 副　査 | 筑波大学准教授 | 博士（文学） | 谷口孝介 |
| 副　査 | 日本女子大学教授 | 博士（文学） | 平舘英子 |

## 論文の内容の要旨

本論文は，『萬葉集』の長歌における対句について，『古事記』『日本書紀』の長歌謡から，創作意識のとみにたかまった柿本人麻呂の対句表現へ，さらに，人麻呂の時期以降，とりわけ中国文学の詩作品の意欲的な摂取が認められることにも焦点を当て，人麻呂から大伴家持に至るまでの対句表現の展開を通時的に考察したものである。

論文の構成は，以下の通りである。

序　章　対句研究における問題点
第一章　進行形式としての対句－記紀歌謡における言い換え・繰り返し－
第二章　進行形式からの離陸－柿本人麻呂の対句表現－
第三章　対句による提示の形式の発展－山部赤人の対句表現－
第四章　歌の展開と指示語の用法－山上憶良の対句表現－
第五章　景物の提示と指示語の用法－萬葉後期歌人の対句表現－
終　章　対句の史的展開－進行形式から修辞へ－

序章では，対句という修辞用語が中国文学からの借用であることを前提として，まずは，その研究の問題点を論じる。第一節では，中国文学における対句の史的変遷を概括し，詩論書・詩話における対句の分類と評価を併せ掲げ，『萬葉集』と並行する本邦の『懐風藻』所収の詩に用いられた対句との比較を試み，もって『萬葉集』の長歌における対句表現とのかかわりについての論述の導入をはかる。次いで第二節では，『萬葉集』の対句の研究史に即して，江戸期の歌論書から現代に至るまでを批判的に辿る。そのうえで，対句の表現が長歌においてはたす機能を再検討すべく，言い換えないし繰り返しといった対照性を持たない対句と，前句と後句の意味内容が異なる対照性を持つ対句を，ともに対句として視野に収め，句の対照の有無によって両者を捉え直すという観点を用意して本論に入る。

第一章では，『古事記』『日本書紀』の長歌謡における言い換えないし尻取式繰り返しの対句を，進行形式としての対句表現として改めて捉え直す。その進行形式としての対句は，うたうという行為のなかで対句が

継起的に連接してゆく口誦性を色濃く残すものと解すべきだと結論づける。くだって，額田王などの初期萬葉歌の対句においては，詩の対句表現を摂取しつつ時間及び空間を総合的に表すに至り，ここに歌謡の進行形式を脱する徴候が認められるとする。

第二章では，柿本人麻呂の対句を論じ，歌の文脈に相応しい語を意識的に択び取って，対句として詠む方法を明らかにする。歌謡の進行形式に顕著な，言い換えないし尻取式繰り返しを受けつつも，人麻呂にあっては，強い創作意識のもとで，条件句を主として歌の構成と密接にかかわる心情表現として詠むこと，これを句の対照を持たない対句の展開と捉えうるならば，句の対照を持たせしめる対句こそが人麻呂の特徴であり，対句の連続において，前の対句における景物の提示を後の対句で受けとめ，さらなる提示を重ねるといった方法が認められることを強調している。かくて，『萬葉集』における対句は，柿本人麻呂によってその表現性が大きく拓かれたことが，作品に即して具体的に解明され，以後，人麻呂をいわば分水嶺として，個々の歌人たちがいかに対句表現を用いたかについての論述がさらに展開される。

第三章では，山部赤人を取りあげている。その対句が，従来の指摘のように，ほとんど景物についてのものであり，句の対照性および対句を重ねる連対の特徴を持つことは周知だが，赤人の作品のばあい，句の対照性というよりはむしろ語の対照的な提示に力点が置かれ，連対においては，語の提示の機能がさらに重要性を増すことになると論じる。景物の提示から人事へと移行させて詠むことは，取りも直さず赤人の姿勢の現れであり，ために，景物にかかわって詩の対句表現を踏まえる傾向性を示していることも重視すべきだとする。

第四章では，赤人と同時期ながら，対照的な作品をものした山上憶良の対句を取りあげる。憶良の対句表現の特徴は，対句と指示語「かく」を結びつけるところにあると捉え，先立つ作品による表現と詩に基づく表現を取り込むなどの対句の連続において，「かく」には歌の展開におけるいわば蝶番の役割を担わせていると論じる。

第五章では，憶良の対句の方法が，作歌時期の重なる大伴坂上郎女・高橋虫麻呂に受け継がれたこと，さらに，少しく遅れる田辺福麻呂にあっては，人麻呂・赤人の対句をより強く意識しつつ，個性的な展開を示したことを論じたうえで，大伴家持の作品を主として考察する。赤人と憶良の対照的な対句の方法が，両者ともに家持の作品に顕現していることを分析しつつ，先立つ対句表現との類型性が多く指摘されるにとどまっていた家持への評価に対して，その独自性を認めるべきだと再考を促す。とくに景物の描写が常套的になりがちな時期にあって，家持が「かく」を用いることによって，歌に現実性を付与すべく独自の展開をはかった点を評価すべきだと強調する。

終章では，『萬葉集』の長歌における対句表現の通時的な展開を改めて押さえ，総じて，『古事記』『日本書紀』の長歌謡における進行形式から，『萬葉集』に至っての，作者の創作意識を反映した修辞技巧としての対句表現の流れを認めうること，また，景物の提示から尻取式繰り返しを介した人事へと転換させる形式が，時代がくだるにつれてその転換の意義を失い，景物と人事の叙述を重層させる形式へと移行すること，さらに，人事を主題とした歌においては，尻取式繰り返しに代わり，対句による描写を重ね，指示語「かく」で総括する形式を認めうることを指摘して結ぶ。

## 審査の結果の要旨

『萬葉集』における対句表現の研究は，従来，主として個別的な歌人と作品について行われてきた。その掘りさげはきわめて深いが，著者が本論文で展開した通時的な考察は皆無に等しいと言ってよい。著者は，個別的に深化した研究成果を慎重に踏まえつつ，『古事記』『日本書紀』の長歌謡から初期萬葉へ，さらに柿本人麻呂の作品へと論述を進め，その人麻呂が対句表現においても画期を成したことを，作品の具体的な分

析を通じて跡づけている。以後，『萬葉集』後期の歌人が，人麻呂をいかに意識しつつ，継承していったかについて，まずは山部赤人の対句表現とその独自性を論じ，次いで赤人とは最も対極的な性格を示す山上憶良の対句を分析する。人麻呂から赤人へという展開は，研究史上穏当な論述だが，憶良の対句表現に着目したことは，斬新かつ独創的であり，『萬葉集』の対句の通時的展開を捉えるうえで不可欠でもあった。その両者の方法が家持の作品のなかで一体化しているという判断もまた特筆される。かくて著者の観点からの通時的な研究は完結し，本論文は高く評価しうるものとなった。

加えて，人麻呂・赤人・憶良・家持といった歌人の作品に即しつつ，中国文学の対句表現をいかに摂取しているかについて，従来の個別的な研究をさらに深める論述がなされており，この点でもまた本論文は評価に値する。

ただし，作品と表現の緻密な分析に徹する著者の論述が，その緻密さゆえにかえって全般を見えにくくしていることも事実である。また，歌に対しては主に詩を対比させるといったように，詩の対句表現に比重をかけすぎた嫌いがあり，文の対句表現の分析とその摂取についての論述が，いささか手薄になった印象は否めない。と同時に，『萬葉集』と並行する『懐風藻』に収められる詩の対句表現の位置づけと，『萬葉集』の表現とのかかわりが，十分に押さえられたとは言いがたい。

これらの課題がなお残ったものの，『萬葉集』における枕詞・序詞・懸詞・対句といった修辞技巧の展開の全体像が，いまだに見通しがたいという研究の現状を踏まえるならば，本論文における対句表現の通時的研究は，その価値と相俟って大きな意義を持つものと認められる。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。